

## 望まないことをさせてやる？——使役動詞 let の意味のスキーマ

マーク・ピーターセン(2010)に、英語の4つの使役動詞 make, let, have, get の意味・用法について次のような説明があります(同書、pp.170, 171)：

- (1) 無理やりさせる場合は、make (someone) do (something)

[言い換え=make ~ to; compel ~ to]

相手の望み通りにさせてあげる(やる)場合は、let (someone) do (something)

[言い換え=allow ~ to; permit ~ to]

頼みさえすれば当然それをしてもらえる、ということを前提で何かをさせる場合は、

have (someone) do (something) [言い換え=(場合によっては) tell ~ to; order ~ to]

してほしいことを、なんとかして、させるようにしむける場合は、

get (someone, something) to do (something)

[言い換え=(場合によっては) persuade ~ to; convince ~ to]

さすが定評あるネイティブの先生だけあって的を射た説明をしているナ・・・と言いたいところですが、このうち let に関してある疑問が出てきます。確かに「当人の望み通りにさせてやる」という場合、次のように let を用いて表現することが可能です：

- (2) My parents agreed to let me study abroad.

(両親は私に留学させてやると言ってくれた(――私は留学したいと思っている))

しかし逆に let を用いた場合必ずそのような意味になるかというと、そうとは限りません。アメリカの小説家 Ernest Hemingway の長編小説 *A Farewell to Arms* (『武器よさらば』) に次の一節があります：

- (3) Don't let her die. Oh, God, please don't let her die.

アメリカ人のイタリア兵 Frederick Henry が恋人のイギリス人の看護婦 Catherine Barkley のことを神に祈っている場面ですが、この場合 Catherine はもちろん自分が死ぬことを望んでいるわけではないのに Henry は “Don't let her die.” と言っています。let が上に記したような意味だとすると、これはおかしいことになります(cf. 大江 1983: 113, 114)。

それでは let のホントの意味は何かということですが、これは次のように定式化することができます：

- (4) S+let+O+Inf. (Sは主語、Oは目的語、Inf. は不定詞(原形動詞))の意味

=抑制・阻害されないと生じやすい事柄(O+Inf.)が生じるのをSが抑制・阻害しない

(2)の場合、「私(=O)」は「留学すること(=Inf.)」を望んでいるので、もしそれを阻害する事情が存在しなければその事柄(=O+Inf.)は当然生じやすくなります。ここでは「両親(=S)」がその事柄を許すことによって、それを妨げない態度をとるということです。(3)の場合は、もしこのまま抑制がなければ「彼女(=O)」が「死ぬ(=Inf.)」という事柄が生じやすい(すなわち、このままだと彼女が死んでしまう)ため、それが生じるのを抑制してほしいと「神(=S)」に祈っているわけです。英英辞典から let の例を補っておきます：

- (5) He decided to let his hair grow long. (CALD<sup>3</sup>)

- (6) Let your shoes dry completely before putting them on. (CALD<sup>3</sup>)

(5)(6)において、「髪が長く伸びること」「靴が乾くこと」はいずれもそれを抑制・阻害するものが存在しなければ自然に生じてしまう事柄であり、このような let のコンテキストと相性がよいことが納得できます。さらに、次のような例もよく見かけます：

- (7) Don't let that discourage you. (そんなことぐらいでがっかりしないで)

- (8) Don't let stress run your life. (ストレスに負けてはいけません) (run = 「・・・を支配する」)

(7)(8)において、それぞれ問題の事柄(「それがあなたをがっかりさせること」「ストレスがあなたの生活を支配すること」)が生じやすいので、それが生じないように自分をしっかりコントロールしなさい、と相手に助言しているわけです。

さて、let のココロは見えてきましたか。同一の語が同一の形式(ここでは S+let+O+Inf.の形式)で用いられている場合、それらの例は(普通は)同じココロでつながっているのです。このような、表現形式に共通するココロ、すなわち意味のスキーマ(schema)を把握することは英語の語学的センスを高める上でとても大切なことです。